

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
編集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鎚木町 198-3
電話 (043) 485-1801

物欲症候群----- 板井 省司 黄色いキスリング----- 中村 庄治
自分史の一部から----- 茂木 一典 こげた金魚----- 岩井 糸子

一休 酬恩庵一休寺を訪ねて

岡本 治之

一休宗純は室町時代の臨済宗禅僧で、京都大徳寺第48世住持である。とんちの一休さんとして馴染み深く、後小松天皇の御落胤ともいわれる。だが、このとんち話は主に江戸時代の庶民によって作られたものである。

酬恩庵一休寺は京都府京田辺市薪まきにあり、学研都市線JR京田辺駅で下車する。街並を抜けると、急に静かな田園の風景が拡がり、酬恩庵の門前に入る。当寺は一休が大応国師の恩に酬いる意味で酬恩庵と命名したという。総門をくぐり、静寂な境内の緩やかな参道を上がると、扉に菊の御紋が透かし彫りになった閉ざされた門がある。標示板に「後小松天皇皇子宗純王墓 宮内庁管轄」とある。一休の墓所である。その前を通り過ぎ、石段を少し下がった

た檜皮屋根の庫裏の玄関からあがる。方丈の艶光りした廊下から、奥に安置された一休禅師の木像を拝する。一休は入寂の年に自分の髭を抜いて像に植付けさせ、二体の等身大の像を造らせた。もう一体は一休ゆかりの京都大徳寺の塔頭真珠庵にある。真珠庵を拝観した折、禅師の木像を間近に拝したが、威厳に圧倒され髭は確認できなかった。

酬恩庵の気品ある方丈庭園を参観の後、庫裏を出て一休の頂相ちんそう(肖像画)がある宝物殿に入った。唐木順三氏は、このざんばら髪で無精髭を伸ばした狂僧の顔を「近代人の顔ですべてを見抜く力を具えている」というが、鋭いなかにも温かな眼差しを感じた。しかし二度目に行ったときは無視された。同じ絵が複数あり毎月替えているとのことだ

あった。目が違うのである。やはり一休は「無類のすね者」の目の方がよい。

一休は名利にからまず日常の民衆のなかで禅を説いた。また茶の湯の祖・村田珠光、能の金春禅竹、連歌の宗祇・宗長らに慕われた。そして応仁の乱で焼失した大徳寺の再建を果たすと、乱が終わった4年後の文明13年(1481)88歳の時、酬恩庵で入寂した。宝物殿を出ると、凜々しい青年一休の像、さらに進むと箒を持ったかわいらしい少年一休の像がある。その後ろに「このはしわたるな」の立て札と小さな橋がある。もちろん真ん中を渡ると、二十一世紀の森に続き、愛らしい童の像があちこちに点在している。

快い思いに浸りながら酬恩庵を後にして、奈良に向かうためJR京田辺駅を通過し、近鉄京都線新田辺駅まで歩いた。なんと駅前で酬恩庵と同じ少年一休像が迎えてくれた。

(編集委員)

物欲症候群

正月のデパートで、一番売れているのは福袋だ。人はなぜ福袋を買うのだろうか。

「買うものがないからだ」「欲しいものが見つからないからだ」でも「何かを買いたい」のだ。モノを買い続けるように「教育」されてしまった今の消費者は、何かを買わないと、イライラしてくるのだ。一種の「買い物依存症」なのだ。

最近、米国では仲間でレストランに行った際、参加者にスマホを提出させ机に積み上げるのが流行っているそうだ。うっかり食事中にスマホを見た人が罰として食事代を全部払うそうだ。

確かに目の前には語り合うべき人がいるのに、スマホの画面の向こうの誰かとつながろうとするなんて失礼千万。人間として当たり前の「誠実さ」を忘れてしまっているのだ。

もし、幸福が消費の度合い

によって決まるものなら、我々はすでに十分幸福である。それどころか、日本も米国も経済が成長すればするほど、生活の満足度が低下する傾向にある。

穏やかな社会環境が取り柄だった日本も、人殺しが増え、いじめが増え、自殺が増え、なんだかみんな目つきが悪くなつたように感じる。

民俗学者の『宮本常一が撮った昭和の情景』の写真集には、一九五五年から二五年間にわたり、全国をくまなく歩いて庶民の暮らしを撮り続けた一〇万点のうち八五〇点が掲載されている。明らかに今の日本人とは目の光が違ふことに気付くと云うのである。仮に人間の幸福度は欲望を満たすことと定義したらどうなるであろうか。満たされたい欲望をどこまでも追い求めねばならなくなるが、疲れないだろうか。

参考・天野祐吉『成長から成熟へ』

(ユーカーが丘 板井省司)

黄色いキスリング

これからのお話は50年も前の出来事です。したがって記憶が定かでない面もあります。

23時45分発の夜行列車で新宿を出発、小沢で小海線に乗り換え、信濃川上で下車。朝はまだ早かったような気がします。バスに乗った登山客は数人でした。「秋山中央」で下車したのは私だけでした。私はいつもの様に重い「黄色いキスリング」を背中にして歩き始めました。

昼食を済ませ、暗くなる前に「大弛小屋」に到着すれば良いと、軽い気持ちで斜面が急になってきた山道を歩き始めました。

斜面の所々に雪が見え始めました。標高2000位の北側斜面です。残雪があつてもおかしくありません。急に単独行の寂しさと気温の低下に不安を感じました。それでも登山道がハッキリしている

内は良かったのですが、残雪が多くなり登山道が見えなくなってきました。登山者の踏み跡もなく木立の形状で登っていききました。雪用のスパッツを着け、上を目指しました。

もうだめかと思いついた時、上の方の木の間に「黄色いキスリング」がチラチラと見えました。ホッとして、その方向に向かって歩きました。不思議なことに足跡が有りません。私のは残雪にバケツの様な足跡です。上のキスリングの人はどうやって歩いているのか？と疑問に思いながら何とか大弛小屋に到着出来ました。

小屋の親父さんにその話をすると、今の時期にこの道から来るのは誰もいないし、今日の客はお前だけだと言われました。

あの「黄色いキスリング」は誰だったのでしょう？

(山崎 中村 庄治)

自分史の一部から

自分史を残そうと思いつてから6年が過ぎた。写真、日記帳、手紙、手帳、卒業・修了証書、通信簿、社歴書、給料明細書、資格証、パスポート、古新聞の収集など種々雑多な資料を整え、年表作成に5年を要した。年表に記入しながら、追想に一喜一憂した。

今まで殆んど忘れかけていたが、小学校5年の時、町内小・中学校の全員が出品する習字大会が実施された。習字の苦手な小生は、他人の失敗作を貰い受け、それをなぞって書いた贋作が優秀賞に選ばれてしまった。当時純情少年？であった小生は、事の次第を父親に話し、教師宅へ行き事情を説明して一件落着となったが、ほろ苦い経験である。

1994年10月に3日程嘔吐と腹痛が続き、食事も摂れ

なくなり、救急車で搬送され、3日間の検査入院で、結腸の一部摘出を宣告された。

術後10日目に「回盲部結腸腫瘍」であったが、初期の為完全摘出したので再発の心配はまず無いと云われた。その時のメモが残っているが、相当なショックを受けた。

其の後、定期検診で6年間通院したが、入院中にメモした用紙や退院後の日記帳を読み返すと、健康体で早く3年が過ぎてくれ、5年が過ぎてくれとの思いが伝わって来る。54日間の入院生活であったが、家族の看護と多くの知人の激励は、忘れまい。自分史は記録に残すだけでなく、年表に列記された事項の一つ一つを想い出し、自然体で感じる事に大きな意味がある。言葉では表現できないほのかな哀愁と郷愁に駆り立てられる昨今である。

(中志津 茂木 一典)

こげた金魚

昔々のお話です。今となつてはほぼ昔々となるのが少々引っかけますが。私の息子が3歳になった頃、次の子の出産のために1カ月程実家に帰っていた時の話です。

私の実家は東京都墨田区の東向島という所がありました。実家では毎日銭湯通いをしていました。息子にとってはプール通いのような感覚ではなかったでしょうか。我が家と違った広い浴場で、嬉々として湯船に向かい走って転ぶ姿に、アツ頭を打たないかな？打ったかな？打ったかも。どうしよう私のような頭になつたら等、懐かしいシーンや思いが浮かんできます。そんなある日、お風呂から上がり早くに服を着せた息子は、私の帰り支度を待ちながら脱衣所をちよこちよこしていました。しばらくすると私の許にきて、不思議そうにこ

う言うのです。

「ママ、こげた金魚がいるよ」
うん？息子が指さした方を見ると、その銭湯の脱衣所の隅にはガラス戸で少し仕切った、涼をよぶスペースに小さな池がありました。私ものぞいて見て息子が言った意味がわかりました。そこには何匹かの鯉が放され、ゆったりと泳いでいたのです。そう錦鯉です。子供の眼にはそのまんま東か、西か？ありのままに映るのですね。私は親馬鹿チャンリン、うちの子は何て可愛い視点でみるのなんて。

あれから40年、40年ちよい。その子も3児の父になり、小さな池は卒業し、世間という名の大海で日々泳いでいます。時は少しもじっとしていません。そして時代は今、錦織圭になりました。

「ママ、こげた金魚がいるよ」

(上座 岩井 糸子)

2月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いた

だいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等の修正をさせていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL 043-485-1801

〒285-0025 佐倉市鎗木町198-3

URL http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

さくら道

「さくら道」の原稿提出日が迫って来たので、机に向かつて思索する。書くことが決まらず、時だけが過ぎてゆく。気分転換に、近所の上手繰川沿いに散歩に出かけた。周辺の「ひつじ田」は雀やキジバト等の野鳥の格好の餌場になっている。冬鳥のツグミの飛来は未だなのか。

（仮称）佐倉西部自然公園の

林の中からは、コジュケイの鳴き声が聞こえてきた。生谷橋から臼井西中学校の間には、5、6羽のカワセミが生息しているが、今日はその姿を目にできずに残念だ。川の辺には、じつとうずくまっている数羽の鴨がいる。鯉も泳いでいる。

冬の新鮮な空気を胸いっぱい吸い込み、豊かな自然にひたりながら家路に就いた。

（長谷川 祐作）

あとながき

『なかま』へのご投稿をお待ち致しております。お蔭さまで、小誌は今月で460号の発行を迎えることが出来ました。

これも、偏に皆さま方のご支援の賜物と感謝申し上げます、編集部一同、次の大台の500号を目指して邁進して参る所存ですが、それには何と申しましても皆さま方からのご投稿が大きな決め手です。

広く、若者やご年配の方々に聞いてもらいたい懐かしく心に残っている思い出話や経験談など、明るい話題のご投稿をお待ち致しております。

なお、ご投稿は、政治や宗教に関することや団体への勧誘、個社名や個別の商品名その他、他誌に掲載されたものなどは、ご投稿出来ません。

また、難しい語句は避けて、気軽に読める明るく、ユニークな内容がお薦めです。

（田中 修司）